

輪転機を止めろ フルシチョフ辞任

■新編集講座 ウェブ版 第49号 2016/4/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

4月を迎えました。春の定期異動で、紙面編集部門にも新しい人材が転入してきます。私は編集制作センター室長時代、編集者の仕事例として、1964年のフルシチョフ・ソ連首相（当時）辞任を朝刊最終版に突っ込んだ大先輩の経験を話していました。半世紀以上も前の話ですが、今も学ぶ点があります。この先輩の手記（※1）をご紹介します。

■ 静かな夜に不穏な外電

昭和三十九（一九六四）年十月十六日（未明）。

朝刊の最終版は既に降版（※2）されて、やがて大阪市内とその近隣地向けの新聞を印刷する輪転機が、回り始めようとしていた。

一面はトップが「東京オリンピック第六日」。大きな事件もなく、机上进行片付けようとする頃、不審な外国情報が入り始めた。

【ロンドン十五日UPI】ロンドンのイブニング・ニュース紙が伝えるところによると、フルシチョフ・ソ連首相（※3）の身邊に重大変化が生じている。フルシチョフ首相の肖像が、宇宙飛行士を迎えるため飾りつけられた赤の広場には見受けられない。十四日訪ソしたドルチコス・キューバ大統領はフルシチョフ首相といまだに会談していない。ソ連の各紙とモスクワ放送は過去二日間、同首相について何ら触れていない。

【ヘルシンキ十五日AFP】ヘルシンキの消息筋は十五日夜、「ソ連共産党中央委員会はフルシチョフ・ソ連首相兼第一書記に代わり、コスイギン第一副首相を首相に、ブレジネフ党中央書記を第一書記に任命することを承認した」と述べた（※4）。

■ 駆けめぐる火のような焦り

今度は現地のモスクワからAP電とUPI電が飛び込んできた。

【モスクワ十五日AP＝共同】モスクワの観測筋は、一団の黒塗りの高級乗用車が十五日午前、ソ連共産党中央委員会本部の前に駐車し、重要会議が開かれていることを示していることに注目している。

【モスクワ十五日UPI】モスクワでは十五日夜、フルシチョフ・ソ連首相に関係するクレムリンの主要人事異動が行われているとの未確認情報が広がっている。これらの情報は公式筋、権威筋によって確認されていない。うわさではコスイギン第一副首相、ブレジネフ党幹部会書記の名が異動の対象にあげられている。

もう、じっとしてはいられない。ソ連で大政変が起ったことは、ほぼ確実だ。世界史的大ニュース。しかし証拠がない。相手はソ連だから、公式発表がない限り、ギリギリまで頼りにならない（※5）。

最終版の輪転機は回り始めている。やるなら、少しでも早く輪転機停止を指示し、トップに組み込まねばならない。焦りが火のように体を駆けめぐる。しかし、これで「フルシチョフが辞めた」、あるいは「辞めさせられた」と言い切れるのか。言う以上、最大級の見出しとレイアウトを伴わねばならないが、それにしても――（※6）。

※1 この文章は、大阪本社整理部（現・編集制作センター）勤務だった吉田潤史氏が、部史（93年制作）に寄せた証言の抜粋です。輪転機を止めるまでの経緯が活写されています。

※2 「降版」は、編集作業を完了し、紙面制作を印刷工程に渡すことを指します。15日夜から続いていた16日付朝刊制作は、日付の変わった16日未明に最終版を降版しました。

※3 フルシチョフ首相は、当時のソ連（現ロシア）の最高権力者だった人物です。

写真は、北京空港で中国の毛沢東主席（中央）と歩くフルシチョフ首相（左）＝59年、UPI



※4 吉田氏によると、AFP（フランスの通信社）は、ヒットも飛ばす代わり「外す」こともあったとのこと。「消息筋の話」に飛びつかず、もう少し具体的な動きを待ったわけです。編集者にはこうした判断も必要です。

※5 当時の通信事情では、モスクワ特派員や東京本社外信部と大阪本社が即座に連絡を取り合うことが難しかったようです。大阪本社の編集者は、独自の判断を迫られていました。

写真は、堂島にあった大阪本社旧社屋＝92年



※6 旧ソ連取材の難しさは、このシリーズの42号「昔、ソ連という国があった 編集者の苦心」（2015/12/15）でもお伝えしました。

■ 清水の舞台から飛び降りた

そこへ、テレタイプ(※7)が次の数行をたたき出した。

【モスクワ十五日AFP】 モスクワの極めて信頼すべき筋は十五日「フルシチョフ・ソ連首相兼第一書記は双方の職を辞任した」と述べた。同筋は「後任には首相にコスイギン、第一書記にブレジネフ党中央委書記が任命された」と語った。十六日朝フルシチョフ首相の肖像写真は官庁の壁からはずされた。モスクワでは警察隊が慎重に配置についている。「よしッ!」。清水の舞台から飛び下りる覚悟で、私は立ち上がった(※8)。編集局中の視線がこちらに注がれている。主任(筆者の部下)が中央の柱の「緊急ベル」の赤いボタンを力いっぱい押し付けた。引き裂くような、けたたましい音は、社内の隅々に、特に、轟々(ごうごう)とほえ立てている印刷現場に響き渡った。このベルには、輪転機を全機立ちどころにストップさせる威力がある(※9)。

「なんだ、なんだ」「なにごとや」。工場から殺気立った面持ちの機長(輪転機作業指揮者)たちが、駆け上がってくる。

「今の時点で、最終版の刷り残し分は何万部か。可能な限り、トップを取り替えて刷り直す。降版予定は四時半。販売店へは朝刊の到着遅れを早急に連絡しておくこと。トップの内容は、フルシチョフ・ソ連首相の辞任」。

私は手早く指示を済ますと、直ちに原稿を活版工場へ送り、トッパンや写真製版の手配をして、血眼でレイアウトを進めた(※10)。

■ それはオレが聞きたい

そのころ、至急の電話連絡を受けた整理部長、局次長、編集局長たちが、続々と駆け付けて来た。

「大変だな」「本当にフルシチョフは辞めたのか」「ニュース源は確かなのか」。それは、オレの方が聞きたいことだ。

組み直して降版を済ませると、止まっていた輪転機が回り始めた。低い地鳴りを足もとに感じながら私は胸で歯嚙(はが)みをしていた。

「確証はない。しかし、確信はある。確かにある」。

やがて、午前五時。ブラウン管にNHKの「朝のニュース」が淡々と流れ始めた。見よ!「ソ連政府の発表によりますと、フルシチョフ共産党書記兼首相は、その職務を解かれ…」

もう全部聞くまでもなかった。いささかの経験による私の予測と決断が的中した。その正しかったことが、これではっきりした。ぐったりと、私は隅のソファに身を沈めた。刷り直して追い刷りをした分は約三万部。「フルシチョフ辞任」をトップに据えた昭和三十九年十月十六日付朝刊は、はばかりながら、我が国では私の作ったこの紙面だけである(※11)。

「これが誤報だったら、オレの首は確実に飛ぶナ」と、あの夜、腹をくくった苦い覚悟も、「なぜもうちょっと早く輪転機を止めなかったのか」とかみついた部長の声も、忘却の中へ薄れていった。

※7 電話線を使ってデータを送り、タイプライターで印字する装置。大阪本社にも設置され、直接、外電情報を入手していました。写真は、テレタイプの一例=53年



※8 「肖像写真の撤去」や「警察隊の配置」など具体的な動きが入ってきました。もはや単なる噂ではない——編集者の決断です。

※9 緊急時に輪転機を止める非常ベルは、堂島の旧社屋にあったほか、西梅田の現社屋にもあり、整理部長が代理者が判断します。写真は、非常ベルに手を置き、使い方の説明をする桐生輝一郎長=87年、堂島の旧社屋で



※10 「フルシチョフ辞任」をトップにした64年10月16日朝刊(大阪本社版)



※11 日本中の新聞を確認したわけではありませんが、少なくとも毎日の東京本社版に「フルシチョフ辞任」はなく、「ソ連首脳異動か」という記事が載っているだけです。

